

Oracle® Business Intelligence Tools

インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2.0.0) for Microsoft Windows

部品番号 : B15763-01

2005 年 1 月

Oracle Business Intelligence Tools インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.1.2.0.0) for Microsoft Windows

部品番号 : B15763-01

原本名 : Oracle Business Intelligence Tools Installation Guide, 10g Release 2 (10.1.2.0.0) for Windows

原本部品番号 : B14160-02

原本著者 : Julia M. Stein

原本協力者 : Andy Page, Carolyn Bruse, Christine Jacobs, Stuart Duggan, Tejas Shah, Robert Hipps, Gavin Lester, Sjon Link, Nikolai Rochnik, Kasturi Shekhar, Joe Malin

Copyright © 2004 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
目的	vi
対象読者	vi
ドキュメントのアクセシビリティ	vi
このマニュアルの構成	vii
表記規則	vii
関連ドキュメント	viii
オラクル社への問合せ	ix
サポートおよびサービス	ix

1 インストールの前に

1.1 Oracle Business Intelligence Tools	1-2
1.1.1 OracleBI Spreadsheet Add-In	1-2
1.1.2 OracleBI Discoverer Administrator	1-2
1.1.3 OracleBI Beans	1-2
1.1.4 OracleBI Discoverer Desktop	1-3
1.1.5 Oracle Business Intelligence Tools でインストールされないコンポーネント: OracleBI Warehouse Builder	1-3
1.2 Oracle Business Intelligence Tools のインストールの概要	1-3
1.3 ハードウェア要件	1-4
1.4 動作環境および必要なパッチ	1-5
1.4.1 Windows の動作環境	1-5
1.5 必要なソフトウェア	1-5
1.5.1 Oracle Database	1-5
1.5.2 BI Beans のみ: Oracle JDeveloper	1-5
1.5.3 Spreadsheet Add-In のみ: Microsoft Excel	1-6
1.6 1つの Oracle ホーム・ディレクトリでの共存	1-6
1.6.1 Oracle ホームに関する考慮事項	1-6
1.6.2 Oracle Business Intelligence Tools の複数インストールの実行	1-6
1.6.3 Oracle Business Intelligence Tools インストールおよび Oracle Database	1-7
1.7 インストール前の作業	1-7
1.7.1 一般的なチェックリスト	1-7
1.7.2 ロケールの設定	1-8
1.7.3 Windows のみ: アシスティブ・テクノロジーの使用	1-8
1.7.4 Windows のみ: Java Access Bridge のインストール	1-8

1.7.5	コンポーネント固有のインストール前の作業	1-9
1.7.5.1	Spreadsheet Add-In	1-9
1.7.5.2	Discoverer Administrator	1-9
1.7.5.3	BI Beans	1-9
1.7.5.4	Discoverer Desktop	1-9
1.8	インストーラ	1-10
1.8.1	インストール時に必要な情報	1-10
1.8.2	Windows NT のみ : Windows システム・ファイルのインストール	1-10

2 Oracle Business Intelligence Tools のインストール

2.1	Oracle Business Intelligence Tools のインストール	2-2
2.2	インストール後の一般的な作業	2-4
2.2.1	TNS 名	2-4
2.2.2	コンポーネントの言語	2-4
2.2.3	Windows のみ : アシスティブ・テクノロジー	2-4
2.3	コンポーネント固有のインストール後の作業	2-5
2.3.1	Spreadsheet Add-In	2-5
2.3.2	Discoverer Administrator	2-5
2.3.3	BI Beans	2-5
2.3.3.1	データベースに関する考慮事項	2-5
2.3.3.2	その他の作業	2-7
2.3.4	Discoverer Desktop	2-8
2.4	ユーザー・ドキュメントへのアクセス	2-8
2.5	コンポーネントの起動	2-9
2.5.1	Spreadsheet Add-In	2-9
2.5.2	Discoverer Administrator	2-9
2.5.3	BI Beans (および Oracle JDeveloper)	2-9
2.5.4	Discoverer Desktop	2-10
2.6	次の作業	2-10

3 Oracle Business Intelligence Tools のアンインストールおよび再インストール

3.1	Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール	3-2
3.2	Oracle Business Intelligence Tools の再インストール	3-3

A トラブルシューティング

A.1	開始する前に	A-2
A.1.1	ハードウェア要件およびインストール前の要件の確認	A-2
A.1.2	リリース・ノートの内容の把握	A-2
A.2	インストールのトラブルシューティング	A-2

B 既存の Oracle BI Beans プロジェクトの移行

B.1	Oracle OLAP インスタンスの移行 (オプション)	B-2
B.2	Oracle BI Beans カタログの移行	B-2
B.3	旧リリースからのユーザー設定の移行	B-2

B.4	Oracle BI Beans ワークスペースの移行	B-3
B.4.1	JSP アプリケーションの手動移行手順	B-4
B.4.1.1	ネームスペースの更新	B-4
B.4.1.2	新規 BI JSP タグ機能へのアクセス	B-4
B.4.1.3	<body> タグの更新	B-4
B.4.1.4	プレゼンテーションにアクセスしたコードの更新	B-5
B.4.1.5	SaveButton JSP タグの更新	B-5
B.4.2	UIX アプリケーションの手動移行手順	B-6
B.4.2.1	イメージのパスの更新	B-6
B.4.2.2	エラー・ページの更新	B-6
B.4.2.3	部分ページ・レンダリングの要素の追加	B-7
B.4.2.4	dialogLinkDef 要素ごとのコードの追加	B-7
B.4.2.5	プレゼンテーションにアクセスしたコードの更新	B-7
B.4.2.6	SaveDef UIX タグの更新	B-7
B.4.3	Java クライアント・クラス・アプリケーションの手動移行手順	B-8
B.4.3.1	グラフのコード変更	B-8
B.4.4	Java サブレット・アプリケーションの手動移行手順	B-8
B.4.4.1	サブレット・アプリケーションの Cabo ディレクトリ内のインストール可能 ファイルの更新	B-8
B.4.4.2	サブレット・アプリケーションのサンプルの参照	B-9

索引

はじめに

この章の項目は次のとおりです。

- 「目的」 vi ページ
- 「対象読者」 vi ページ
- 「このマニュアルの構成」 vii ページ
- 「ドキュメントのアクセシビリティ」 vi ページ
- 「表記規則」 vii ページ
- 「関連ドキュメント」 viii ページ
- 「オラクル社への問合せ」 ix ページ
- 「サポートおよびサービス」 ix ページ

目的

Oracle Business Intelligence Tools は、BI アプリケーションを開発および使用するための包括的な製品セットです。このマニュアルでは、Oracle Developer Suite に付属のスタンドアロン型 Oracle Business Intelligence Tools の CD-ROM から Oracle Business Intelligence Tools のコンポーネントをインストールする方法について説明します。

このインストール手順は、ハードウェアおよびソフトウェアの構成や Oracle Business Intelligence Tools でインストールする製品のバリエーションにあわせて変更できます。この製品のインストールおよび使用に関する最新の追加情報は、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』を参照してください。

対象読者

このマニュアルは、次のような Oracle Business Intelligence Tools の各種コンポーネントのインストールおよび構成担当者を対象としています。

- ビジネス・ユーザー
- Business Intelligence アプリケーション開発者
- ウェアハウス管理者
- システム管理者
- その他の MIS 担当者

ユーザーは、システム管理操作に慣れていることを前提としています。

ドキュメントのアクセシビリティ

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

JAWS (Windows のスクリーン・リーダー) は、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

このマニュアルの構成

このマニュアルの構成は次のとおりです。

- **第1章「インストールの前に」**では、Oracle Business Intelligence Tools のインストール要件について説明します。
- **第2章「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」**では、Oracle Business Intelligence Tools の標準的なインストール手順をステップごとに説明します。
- **第3章「Oracle Business Intelligence Tools のアンインストールおよび再インストール」**では、Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントのアンインストール方法について説明します。
- **付録A「トラブルシューティング」**では、インストールに関するトラブルシューティングのガイドラインを記載します。

表記規則

最新版ドキュメントの確認

ソフトウェア製品にドキュメントが付属している場合は、Oracle Technology Network の Web サイトでもドキュメントをダウンロードできます。ドキュメントによっては、出荷後にさらに改訂される場合があります。改訂されたドキュメントは、Oracle Technology Network の Web サイトにも掲載されます。ドキュメントを参照する際は、手元のドキュメントが最新版であることを確認してください。確認を行うには、Web ブラウザを使用して次の URL から製品のドキュメントへアクセスしてください。http://otn.oracle.co.jp/

ドキュメントをダウンロードする前に、ドキュメントのタイトルとリリース番号がソフトウェア製品のリリース番号と一致していることを確認してください。また、印刷日もチェックして最新版のドキュメントを使用していることを確認してください。ドキュメントの部品番号から、必要なドキュメントを特定することもできます。メインとなる部品番号は、特定リリースの特定プラットフォームの特定ドキュメントに対する固有の番号です。改訂版は、ダッシュ記号の後に続く拡張番号を大きくすることで表します。つまり、部品番号 B14160-02 は、10g リリース 2 (10.1.2.0.0) の『Oracle Business Intelligence Tools インストール・ガイド』for Microsoft Windows の第2版で、部品番号 B14160-01 に替わることを意味します。

このマニュアルで使用される表記規則

このマニュアルに記載される Windows とは、Windows NT、Windows 2000 および Windows XP オペレーティング・システムを指します。Linux とは、Linux x86 オペレーティング・システムを指します。Oracle Database 用の SQL*Plus インタフェースは、SQL とも呼ばれます。

例では、特に明記されないかぎり、各行末で改行することを意味します。実際には、入力行の末尾で [Enter] キーを押す必要があります。

このマニュアルでは、次の表記規則も使用されます。

規則	意味
...	文やコマンドに含まれる水平の省略記号は、その例に直接関係のない文やコマンドの部分が省略されていることを意味します。
太字体	本文中の太字は、インタフェースのボタンやリンクを指します。また、主要となる考え方を強調する際にも太字が使用されます。
unicode テキスト	Unicode テキストは、正確なコード、ファイル・ディレクトリや名前、およびリテラル・コマンドを示します。
<i>イタリック体の unicode テキスト</i>	イタリック体の unicode テキストは、ユーザーが値を指定するパラメータを指します。
[]	大カッコで囲まれたテキストは、ユーザーが選択可能な（または選択しなくてもよい）オプション句を示します。

関連ドキュメント

Oracle Business Intelligence Tools のユーザー・ドキュメントは、次の URL で入手可能です。
<http://www.oracle.com/technology/products/bi>

Oracle Business Intelligence Tools のドキュメントには、次のマニュアルが含まれています。

- Oracle Business Intelligence Tools のドキュメントに含まれるマニュアル
 - 『Oracle Business Intelligence 概要』
 - 『Oracle Business Intelligence Tools インストレーション・ガイド』
 - 『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』
- Oracle Discoverer のドキュメントに含まれるマニュアル
 - 『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』
 - 『Oracle Business Intelligence Discoverer Desktop ユーザーズ・ガイド』
 - 『Oracle Business Intelligence Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』
 - 『Oracle Business Intelligence Discoverer Viewer ユーザーズ・ガイド』

■ Spreadsheet Add-In のオンライン・ヘルプ形式のドキュメント

■ OracleBI Beans のオンライン・ヘルプ形式のドキュメント

Oracle Business Intelligence Tools に付属のドキュメントの他、次に示す Oracle のドキュメントも参考にしてください。

- OracleBI Warehouse Builder のドキュメントに含まれるマニュアル
 - 『Oracle Warehouse Builder インストレーションおよび構成ガイド』
 - 『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』
 - 『Oracle Warehouse Builder トランスフォーメーション・ガイド』
 - 『Oracle Warehouse Builder スクリプト・リファレンス』
 - 『Oracle Warehouse Builder Java API Reference』
 - 『Oracle Warehouse Builder リリース・ノート』
- Oracle Business Intelligence のドキュメントに含まれるマニュアル
 - 『Oracle Business Intelligence インストレーション・ガイド』
 - 『Oracle Business Intelligence リリース・ノート』
- Oracle Business Intelligence に付属の Oracle Discoverer のドキュメント
 - 『Oracle Business Intelligence Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』
 - 『Oracle Business Intelligence Discoverer 構成ガイド』
- Oracle Database のドキュメント
 - 『Oracle データ・ウェアハウス・ガイド』
 - 『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』
 - 『Oracle OLAP リファレンス』
 - 『Oracle OLAP DML リファレンス』
 - 『Oracle OLAP 開発者ガイド - Oracle OLAP API』
 - 『Oracle OLAP Java API Reference』
 - 『Oracle OLAP Analytic Workspace Java API Reference』

オラクル社では上記以外にも、その他のドキュメント、トレーニング、サポート・サービスなど、Oracle Business Intelligence Tools の理解と知識を深めるための追加情報ソースを提供しています。すべての製品にはオンライン・ヘルプ・システムが組み込まれており、ドキュメントよりもオンライン・ヘルプ・システムの方が主要な情報ソースとなる場合もあります。追加ドキュメントの入手方法は、「[オラクル社への問合せ](#)」を参照してください。

オラクル社への問合せ

OracleMetaLink

OracleMetaLink は Oracle サポートの Web サイトです。ここでは、ドキュメント、パッチ情報、BUG レポート、TAR エントリなど、最新の製品情報が掲載されています。このサイトにご登録いただくと、電子メール、電話および Web を利用して、あらゆる Oracle 製品についてお問い合わせいただけます。OracleMetaLink の URL は次のとおりです。

<http://metalink.oracle.com>

OracleMetaLink を定期的にチェックして、Oracle Business Intelligence Tools に関する情報や更新を確認してください。

ドキュメント

オラクル社の製品のドキュメントは、電話またはインターネットからご注文いただけます。

- Oracle Business Intelligence Tools の技術サポートの詳細は、次の URL から Oracle World Wide Support サービスまでお問い合わせください。<http://www.oracle.com/support>

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

インストールの前に

この章では、インストール・コンポーネントおよびインストール・プロセスについて詳しく説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 1.1 項「Oracle Business Intelligence Tools」 1-2 ページ
- 1.2 項「Oracle Business Intelligence Tools のインストールの概要」 1-3 ページ
- 1.3 項「ハードウェア要件」 1-4 ページ
- 1.4 項「動作環境および必要なパッチ」 1-5 ページ
- 1.5 項「必要なソフトウェア」 1-5 ページ
- 1.6 項「1 つの Oracle ホーム・ディレクトリでの共存」 1-6 ページ
- 1.7 項「インストール前の作業」 1-7 ページ
- 1.8 項「インストーラ」 1-10 ページ

1.1 Oracle Business Intelligence Tools

Oracle Business Intelligence Tools では、ユーザーはデータの管理、カスタム・アプリケーションの開発、およびスプレッドシートへのデータの組込みを行うことができます。管理者は、Oracle Business Intelligence で使用するリレーショナル・データソースを効率的に準備できます。開発者は、マルチディメンション (OLAP) ・データソースに対して使用するカスタム・アプリケーションを短期間で開発できます。ビジネス・ユーザーは、Microsoft Excel のスプレッドシートでマルチディメンション・データに直接アクセスできるようになります。Oracle Business Intelligence Tools を使用することにより、組織が業務、顧客およびサプライヤを適時正確に把握して収益性を高めることのできるシステムが実現します。

包括的なビジネス・インテリジェンス・ソリューションである Oracle Business Intelligence Tools は、次のコンポーネントで構成されています。

- [OracleBI Spreadsheet Add-In](#)
- [OracleBI Discoverer Administrator](#)
- [OracleBI Beans](#)
- [OracleBI Discoverer Desktop](#)
- [Oracle Business Intelligence Tools でインストールされないコンポーネント : OracleBI Warehouse Builder](#)

1.1.1 OracleBI Spreadsheet Add-In

OracleBI Spreadsheet Add-In を使用すると、Microsoft Excel で Oracle OLAP データを処理できるようになります。ウィザードを使用して OLAP クエリーを作成できます。また、Excel で直接ページングやドリル操作を行うことによるデータの移動、ウィザードを使用した OLAP ベースの計算の作成、使い慣れた Excel ベースの計算式や関数を使用したデータの拡張、グラフの作成、およびその他の Excel 標準機能の Oracle データでの使用が可能です。

1.1.2 OracleBI Discoverer Administrator

OracleBI Discoverer Administrator は、リレーショナル型の Discoverer ソリューションのデータベースを管理するための管理ツールです。リレーショナル・データソースに対し、OLAP オプションなしで Discoverer を使用する場合は、Discoverer Administrator を使用して、技術系以外のビジネス・ユーザー用の Discoverer End User Layer (EUL: データベース名、結合およびその他の技術的な詳細情報を抽象化するセマンティック・レイヤー) を作成および管理します。

また、Discoverer Administrator では、ユーザー権限やアクセス権限によってレポート環境のセキュリティを保護することもできます。Discoverer Administrator は、使用するデータベースや Oracle Applications 固有のセキュリティを利用して、そのセキュリティ・ポリシーに自動的に従うため、ユーザーやアクセス権限の定義を 2 度行う必要はありません。

1.1.3 OracleBI Beans

OracleBI Beans を使用すると、Oracle テクノロジ・プラットフォームを利用するビジネス・インテリジェンス・アプリケーションを短期間で開発できます。BI Beans は、開発者の生産性向上、分析力の向上、強力なレポートの作成、およびユーザー間の情報共有を実現する、セキュリティと拡張性に優れたプラットフォームを提供します。

開発者やビジネス・ユーザーが Oracle Database の埋込み OLAP エンジンの分析機能を利用できるように、BI Beans には Query Builder と Calculation Builder という 2 つのツールが用意されています。Query Builder では、「売上成長率に基づいた上位 5 商品」や「得意先に対するこれら商品の販売状況」などのビジネス用語を使用して、データベース・クエリーを表すことができます。Calculation Builder では、テンプレート方式のウィザードを使用して、売上予想額と実際の売上額に基づいた売上変動率など、分析用の新しいビジネス・インジケータを定義できます。

1.1.4 OracleBI Discoverer Desktop

OracleBI Discoverer Desktop は、Web ベースの Oracle Discoverer Plus のかわりに使用できる、Discoverer ワークブックを作成するためのクライアント / サーバー・コンポーネントです。Discoverer Plus と同様に、Discoverer Desktop も非定型のクエリー、分析およびレポート作成を行うためのビジネス・ユーザー向けツールです。これは、データの選択、ワークシートのフォーマット、Oracle Database の数値および統計分析機能を利用するためのツールと同じです。

1.1.5 Oracle Business Intelligence Tools でインストールされないコンポーネント：OracleBI Warehouse Builder

OracleBI Warehouse Builder は Oracle Business Intelligence Tools のコンポーネントですが、Oracle Business Intelligence Tools とは別にインストールします。

OracleBI Warehouse Builder は、企業のデータ・ウェアハウス、データ・マートおよびビジネス・インテリジェンス・アプリケーションの設計とデプロイを行うための統合ソリューションを提供するビジネス・インテリジェンス・ツールです。このツールを使用すると、分散されたデータソースやターゲット間でのデータ統合を容易に行うことができます。さらに、Warehouse Builder には、開発するシステムのライフ・サイクルを管理するのに必要な機能がすべて揃っています。

詳細は、viii ページの「[関連ドキュメント](#)」に記載されている OracleBI Warehouse Builder のドキュメントを参照してください。

1.2 Oracle Business Intelligence Tools のインストールの概要

Oracle Business Intelligence Tools のインストールでは、ユーザー・ロールに基づいたインストール・プロファイルが用意されています。選択したロールによって、デフォルトでインストールされるコンポーネントの組合せが提示されますが、カスタム・インストールを選択し、必要なコンポーネントの組合せを自由に指定することも可能です。

- **ビジネス・ユーザー**：ビジネス・ユーザー向けの分析機能とレポート機能が提供されるオプションです。このオプションでは、[OracleBI Spreadsheet Add-In](#) がインストールされます。
- **管理者 / パワー・ユーザー**：技術レベルの高いユーザー向けの End User Layer (EUL) 管理機能が提供されるオプションです。このオプションでは、[OracleBI Discoverer Administrator](#) がインストールされます。
- **開発者**：BI アプリケーションを開発するユーザー向けのツールがインストールされるオプションです。このオプションでは、[OracleBI Beans](#) がインストールされます。

表 1-1 に、各ロールでインストールされる Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントを示します。

表 1-1 Oracle Business Intelligence Tools インストール・オプションおよびコンポーネント (Windows)

コンポーネント	ビジネス・ユーザー	パワー・ユーザー	BI 開発者	カスタム・インストール
Spreadsheet Add-In	はい	いいえ	いいえ	任意
Discoverer Administrator	いいえ	はい	いいえ	任意
OracleBI Beans (Oracle JDeveloper を含む)	いいえ	いいえ	はい	任意
Discoverer Desktop	いいえ	いいえ	いいえ	任意

1.3 ハードウェア要件

表 1-2 に、Oracle Business Intelligence Tools の基本的なハードウェア要件を示します。

表 1-2 Oracle Business Intelligence Tools ハードウェア要件

ハードウェア・アイテム	要件
CPU	<ul style="list-style-type: none"> ■ Pentium または互換プロセッサ (300 MHz 推奨)
メモリー	256MB ¹
ディスク容量	<ul style="list-style-type: none"> ■ ビジネス・ユーザー向けのインストール: Spreadsheet Add-In が含まれ、342 MB のディスク容量を必要とします。 ■ 管理者 / パワー・ユーザー向けのインストール: Discoverer Administrator が含まれ、343 MB のディスク容量を必要とします。 ■ 開発者向けのインストール: BI Beans が含まれ、101 MB のディスク容量を必要とします。 ■ カスタム・インストール: コンポーネントを自由に組み合わせることができます。全製品を含めると合計 547 MB のディスク容量が必要となります。Discoverer Desktop は単独で 482 MB 必要です。
合計ページファイル・サイズまたはスワップ領域	<ul style="list-style-type: none"> ■ Windows: 1535 MB
TMP サイズ	<ul style="list-style-type: none"> ■ Windows: 55 MB
ビデオ	コンピュータに少なくとも 256 色の表示機能が必要です。

¹ インストールに必要な最小メモリー。これは、すべての Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントの最小メモリーではありません。各コンポーネントのメモリー要件は、表 1-3 を参照してください。

表 1-3 に、各 Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントのメモリー要件を示します。

表 1-3 Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントのメモリー要件

コンポーネント	メモリー
Spreadsheet Add-In	287 MB
Discoverer Administrator	384 MB
BI Beans (Oracle JDeveloper を含む)	91 MB
Discoverer Desktop	128 MB

1.4 動作環境および必要なパッチ

BI Beans は、Microsoft Windows 2000/XP/2003、Sun Solaris、HP PA-RISC HP-UX（64 ビット）および Linux x86 の各動作環境に対応しています。このマニュアルでは、Windows で BI Beans をインストールする方法についてのみ扱います。その他のプラットフォーム上での BI Beans に関するドキュメントは、次の URL からダウンロードできます。
<http://www.oracle.com/technology>

Spreadsheet Add-In, Discoverer Administrator および Discoverer Desktop は、Microsoft Windows 2000/XP/2003 の動作環境にのみ対応しています。

1.4.1 Windows の動作環境

表 1-4 に、Oracle Business Intelligence Tools に対する Windows 動作環境のソフトウェア要件を示します。

表 1-4 Oracle Business Intelligence Tools Windows のソフトウェア要件

ソフトウェア・アイテム	要件
Windows の動作環境	<ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows 2000 (Service Pack 3) 以降 ■ Microsoft Windows XP Professional Edition (Service Pack 1) 以降 ■ Microsoft Windows 2003 (32 ビット)

注意： 比較的新しいバージョンの Windows では、C 以外のシステム・ドライブを使用できます。このマニュアルでは、システム・ドライブを「システムのデフォルト・ドライブ」と呼びます。システムのデフォルト・ドライブには C 以外のドライブも使用できますが、

このマニュアルのほとんどの例では、システムのデフォルト・ドライブとして C を使用しています。

1.5 必要なソフトウェア

この項では、Oracle Business Intelligence Tools およびそのコンポーネントのソフトウェア前提条件について説明します。

1.5.1 Oracle Database

Oracle Database は Oracle Business Intelligence Tools に必要なソフトウェアです。Oracle9i Database および Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.3 以上) はどちらも Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 (10.1.2.0.0) と互換性があります。

詳しい考慮事項は、1.6.3 項「Oracle Business Intelligence Tools インストールおよび Oracle Database」を参照してください。

BI Beans または Spreadsheet Add-In のみ： BI Beans または Spreadsheet Add-In を Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントの 1 つとしてインストールする場合は、Oracle Database の特定のリリースおよびパッチのみがサポートされます。どちらのコンポーネントも、Oracle Database に関する要件は同じです。これらのコンポーネントに必要な Oracle Database のサポート対象バージョンの詳細は、1.7.5.1 項「Spreadsheet Add-In」または 1.7.5.3 項「BI Beans」を参照してください。

1.5.2 BI Beans のみ : Oracle JDeveloper

BI Beans をインストールする場合は、同じコンピュータ上に Oracle JDeveloper 10g (10.1.2 以降) をインストールする必要があります。BI Beans のインストール時には、JDeveloper のルート・ディレクトリのパスを指定する必要があります。これを指定しないと、インストーラを使用しても BI Beans がインストールされません。BI Beans の前提条件となる Oracle JDeveloper の詳細は、1.7.5.3.1 項「Oracle JDeveloper」を参照してください。

1.5.3 Spreadsheet Add-In のみ : Microsoft Excel

Spreadsheet Add-In をインストールする場合は、同じコンピュータ上に Microsoft Excel をインストールする必要があります。この前提条件の詳細は、1.7.5.1 項「[Spreadsheet Add-In](#)」を参照してください。

1.6 1 つの Oracle ホーム・ディレクトリでの共存

この項では、1 つの Oracle ホーム・ディレクトリでの Oracle 製品の共存、および 1 台のコンピュータに複数の Oracle 製品をインストールする際のガイドラインについて説明します。

1.6.1 Oracle ホームに関する考慮事項

Oracle ホームは、Oracle ソフトウェアのインストール先となる最上位ディレクトリです。一部の Oracle 製品をそれぞれの Oracle ホームにインストールし、その他の Oracle 製品を同一の Oracle ホームにまとめてインストールすることも可能です。

Oracle Business Intelligence Tools は、次の Oracle ホームにのみインストールできます。

- 新しい個別の Oracle ホーム
- 既存の標準 Oracle Application Server 10.1.2 中間層の Oracle ホーム
- 既存の Oracle Business Intelligence 10g リリース 2 (10.1.2.0.0) の Oracle ホーム Oracle Business Intelligence と Oracle Business Intelligence Tools を、同じコンピュータ上で別々の Oracle ホームにインストールすることもできます。

このマニュアルでは、ディレクトリ・パスにプレースホルダ・テキスト `DB_ORACLE_HOME` が含まれている場合があります。このテキストは、Oracle Database のインストール用に選択した Oracle ホーム・ディレクトリまでのパスを表しています。同様に、プレースホルダ・テキスト `BIT_ORACLE_HOME` は、Oracle Business Intelligence Tools のインストール先となる Oracle ホーム・ディレクトリを表しています。

注意： Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 (10.1.2.0.0) および Oracle Application Server 10g (9.0.4) を同じ Oracle ホーム・ディレクトリにインストールする場合は、`BIT_ORACLE_HOME` からポート 8888 で Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) を起動しないでください。これを行うと、OC4J のインスタンスが失敗します。

1.6.2 Oracle Business Intelligence Tools の複数インストールの実行

次のガイドラインは、同じコンピュータ上に Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 (10.1.2.0.0) の複数インスタンスをインストールする場合に該当します。また、Oracle Developer Suite がすでにインストールされているコンピュータ上に Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 (10.1.2.0.0) をインストールする場合にも当てはまります。

- 最初に Oracle Business Intelligence Tools をインストールした後、必ずコンピュータを再起動してください。
- 必要なインストールをすべて処理できるだけの十分なディスク容量があることを確認してください。必要なディスク容量を確認するには、[表 1-2](#) を参照してください。
- 2 回目以降のインスタンスは、前のインスタンスとは異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。
- Windows のみ:最後のインストールが完了した後、コンピュータを再起動してください。

1.6.3 Oracle Business Intelligence Tools インストールおよび Oracle Database

注意： Oracle Business Intelligence Tools と Oracle データベースで同じ Oracle ホームを共有することはできません。

Oracle Business Intelligence Tools をインストールする際に、同じコンピュータ上に Oracle Database のインスタンスがすでにインストールされているか、またはインストールする予定がある場合は、次のガイドラインに従ってください。

- 両方のインストールを処理できるだけの十分なディスク容量があることを確認してください。必要な合計ディスク容量を確認するには、特定の Oracle Database のインストール・ガイドおよびこのマニュアルの表 1-2 を参照してください。
- Windows のみ：Oracle Database をまだインストールしていない場合は、まずインストールし、データベースのインストールが完了した後にコンピュータを再起動してください。その後、Oracle Business Intelligence Tools をインストールできます。
- Oracle Business Intelligence Tools は、Oracle Database とは異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。
- Windows のみ：Oracle Business Intelligence Tools のインストールが完了した後、コンピュータを再起動してください。

1.7 インストール前の作業

Oracle Business Intelligence Tools をインストールする前に、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』を確認してください。最新のリリース・ノートは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/products/bi>) で入手できます。

Oracle Business Intelligence Tools のインストール前の作業は次のとおりです。

- 一般的なチェックリスト
- ロケールの設定
- Windows のみ：アシスティブ・テクノロジーの使用
- Windows のみ：Java Access Bridge のインストール
- コンポーネント固有のインストール前の作業

1.7.1 一般的なチェックリスト

- Windows NT、2000 または XP Professional を使用している場合は、管理者グループのメンバーとしてコンピュータにログオンしていることを確認してください。
- すべての Oracle サービスまたは Oracle プロセスを終了し、開いているアプリケーションをすべて閉じてください。

1.7.2 ロケールの設定

インストーラのユーザー・インタフェース言語は Java Virtual Machine (JVM) のロケールの設定に基づいており、このロケールはオペレーティング・システム環境のロケールに基づいています。特定のロケールでインストーラを実行するには、インストーラを起動する前に、オペレーティング・システム環境のロケールを設定します。

表 1-5 に、インストーラでサポートされるロケール言語を示します。

表 1-5 インストーラで表示可能な言語

言語	ISO-639 言語コード
ブラジル・ポルトガル語	pt_BR
カナダ・フランス語	fr
英語	en
フランス語	fr
イタリア語	it
日本語	ja
韓国語	ko
ラテンアメリカ・スペイン語	eSA
簡体字中国語	zh_CN
スペイン語	e

設定しているロケールがこの表にない場合は、インストーラが英語で表示されます。

1.7.3 Windows のみ : アシスティブ・テクノロジーの使用

Java ベースのアプリケーションやアプレットと連動するスクリーン・リーダーなどのアシスティブ・テクノロジーを使用する場合は、`access_setup.bat` を実行して次のファイルをインストールしてください。

- `JavaAccessBridge.dll`
- `WindowsAccessBridge.dll`
- `JAWTAccessBridge.dll`

`access_setup.bat` の実行後、スクリーン・リーダーを再起動する必要があります。

`access_setup.bat` ファイルは、CD-ROM Disk 1 または DVD に収録されています。

メディア	ファイルの場所
CD-ROM ラベル Disk1	¥install
DVD	¥bitools¥install

1.7.4 Windows のみ : Java Access Bridge のインストール

インストールを実行する目的でアシスティブ・テクノロジーを使用する場合は、インストーラによって Java Access Bridge 1.0.3 のファイルがコンピュータ上の `c:¥windows¥system32` ディレクトリにコピーされ、JAR およびプロパティ・ファイルが `c:¥program files¥oracle¥jre1.3.1` ディレクトリにコピーされることに注意してください。詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』を参照してください。

1.7.5 コンポーネント固有のインストール前の作業

インストールする予定のコンポーネント製品ごとに、次の作業を完了してください。インストール前の補足説明は、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』を参照してください。

1.7.5.1 Spreadsheet Add-In

Spreadsheet Add-In では、アドインをインストールする前に、コンピュータに Microsoft Excel をインストールしておく必要があります。また、このアドインでは、Oracle Database の特定のリリースおよびパッチもサポートされています。

1.7.5.1.1 Microsoft Excel Oracle OLAP Spreadsheet Add-In をインストールするには、Microsoft Excel バージョン 2000、XP または 2003 をコンピュータにインストールしておく必要があります。

1.7.5.1.2 Oracle Database Spreadsheet Add-In では、Oracle9i Database または Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.3 以上) に格納されているデータがサポートされません。ただし、サポート対象となるのは特定のリリースおよびパッチのみです。データベースおよび必要なパッチのインストールは、コンポーネントのインストール前とインストール後のどちらに行っても構いません。インストール後の作業に関する説明は、[2.3.3.1 項「データベースに関する考慮事項」](#)を参照してください。

1.7.5.2 Discoverer Administrator

Discoverer Administrator に固有の、インストール前の要件はありません。

1.7.5.3 BI Beans

BI Beans には Oracle JDeveloper の拡張機能が備わっているため、BI Beans をインストールする前に、コンピュータに JDeveloper をインストールする必要があります。BI Beans では、Oracle Database の特定のリリースおよびパッチがサポートされています。

1.7.5.3.1 Oracle JDeveloper BI Beans には Oracle JDeveloper の拡張機能が備わっています。BI Beans をインストールする前に、Oracle Technology Network (<http://oracle.com/technology>) から Oracle JDeveloper 10.1.2 をダウンロードしてコンピュータにインストールする必要があります。詳細は、Oracle JDeveloper のインストール・ガイドを参照してください。このマニュアルは、Oracle Technology Network 上で他の JDeveloper ドキュメントとともに提供されています。

BI Beans をインストールする際には、インストーラによって JDeveloper の場所を尋ねられません。JDeveloper がコンピュータにインストールされていないと、BI Beans はインストールされません。

1.7.5.3.2 Oracle Database BI Beans では、Oracle9i Database または Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.3 以上) に格納されているデータがサポートされます。ただし、サポート対象となるのは特定のリリースおよびパッチのみです。データベースおよび必要なパッチのインストールは、コンポーネントのインストール前とインストール後のどちらに行っても構いません。インストール後の作業に関する説明は、[2.3.3.1 項「データベースに関する考慮事項」](#)を参照してください。

1.7.5.4 Discoverer Desktop

Discoverer Desktop に固有の、インストール前の要件はありません。

1.8 インストーラ

Oracle Business Intelligence Tools では、Oracle Universal Installer（このマニュアルでは「インストーラ」と呼ばれる）を使用して、コンポーネントのインストールや環境変数の設定を行います。インストーラを使用すると、ステップ形式でインストール・プロセスを進めることができます。

1.8.1 インストール時に必要な情報

インストーラでは、各画面の指示に従ってインストール・プロセスを進めていきます。表 1-6 に、動作環境や選択したインストール・オプションに応じて必要となる情報を示します。

表 1-6 インストール時に必要な情報

アイテム	インストール・タイプ	例
Oracle Business Intelligence Tools 用の Oracle ホームの名前およびパス ¹	すべて (for Windows)	名前: BIToolsHome パス: C:¥BIToolsHome または /private/BIToolsHome
Oracle JDeveloper のルート・ディレクトリ (JDeveloper の実行可能ファイルの場所ではなく、JDeveloper のインストール先ディレクトリ)	この情報は、BI Beans のインストールを選択した場合にのみ尋ねられます (開発者ロールの一部またはカスタム・インストールの一部として使用可能)。	パス: C:¥DSHome¥JDev10g または /private/DSHome/JDev10g
Linux, Solaris, HP-UX のグループ名	すべて (Linux, Solaris, HP-UX のみ)	devsuitegrp
Java SDK ディレクトリ	すべて (HP-UX のみ)	/opt/java/java.1.4.1

¹ 詳細は、1.6.1 項「Oracle ホームに関する考慮事項」を参照してください。

1.8.2 Windows NT のみ : Windows システム・ファイルのインストール

Oracle Business Intelligence Tools では、いくつかのファイルが Windows システム・ディレクトリ内に存在する必要があります。Oracle Business Intelligence Tools のインストール時には、コンピュータ上の既存のファイルが検証され、Oracle Business Intelligence Tools の要件に従っているかどうかを確認されます。ファイルが存在しない場合や、存在しても日付が古い場合は、インストーラによって必要なファイルがインストールされます。

インストール時に、日付の古いファイルを別のプロセスが使用している場合は、インストーラが停止し、エラー・ダイアログが表示されます。これは、Windows を再起動して、更新ファイルを有効にする必要があるためです。インストーラの停止と、システム再起動後のインストーラの再起動は自動的に行われません。

Oracle Business Intelligence Tools には、必要な Windows システム・ファイル用の補足インストールが含まれています。このインストールでは、完了時に必要に応じてコンピュータが自動的に再起動されます。

Oracle Business Intelligence Tools のインストール中に Windows システム・ファイルのエラーが検出された場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログを閉じた後、次の説明に従って Windows システム・ファイルのインストールを開始してください。Windows システム・ファイルのインストールを実行しないと、Oracle Business Intelligence Tools のインストールを続行することはできません。

Windows システム・ファイルのインストールを開始する手順は、次のとおりです。

1. 「終了」をクリックして、インストーラを終了します。
2. CD-ROM のルート・ディレクトリ、または DVD のルート・ディレクトリ下にある `¥bi` ディレクトリに変更します。
3. `wsf.exe` を実行します。

Windows システム・ファイルのインストーラを制御するスクリプトは、既存の Oracle ホームを検出しようとします。インストーラで Oracle ホームが検出されない場合は、「**ファイルの場所**」ダイアログが表示されます。ダイアログから Oracle ホームを選択してください。

再起動が必要な場合は、Windows が自動的に再起動されます。そうでない場合は、インストール完了ダイアログが表示されずに、Windows システム・ファイルのインストールが終了します。

4. Windows の再起動後、または Windows システム・ファイルのインストールが完了したら、Oracle Business Intelligence Tools のインストールをやり直します。

Oracle Business Intelligence Tools の インストール

この章では、Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントのインストール手順について説明します。この章の項目は次のとおりです。

- 2.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」 2-2 ページ
- 2.2 項「インストール後の一般的な作業」 2-4 ページ
- 2.3 項「コンポーネント固有のインストール後の作業」 2-5 ページ
- 2.4 項「ユーザー・ドキュメントへのアクセス」 2-8 ページ
- 2.5 項「コンポーネントの起動」 2-9 ページ
- 2.6 項「次の作業」 2-10 ページ

2.1 Oracle Business Intelligence Tools のインストール

インストーラを起動したら、インストーラ画面をナビゲートするためのボタンに注意してください。「インストールされた製品」をクリックすると、コンピュータ上に既存の Oracle ソフトウェアを確認できます。「戻る」または「次へ」が有効なときにクリックすると、インストーラの画面間を移動できます。また、「取消」をクリックすると、処理を停止してインストーラを終了できます。「インストール」ボタンが有効なときにクリックすると、ファイルのインストールが始まります。

「ようこそ」画面で「製品の削除」をクリックすると、既存の Oracle ソフトウェアをアンインストールできます。「インストールされた製品」および「製品の削除」オプションの詳細は、第 3 章「Oracle Business Intelligence Tools のアンインストールおよび再インストール」を参照してください。

Oracle Universal Installer を使用して Oracle Business Intelligence Tools をインストールする手順は、次のとおりです。

1. Oracle Database などの Oracle サービスをすべて終了します。
2. インストーラを起動します。
 - **CD-ROM:** 「Disk 1」というラベルの付いた Oracle Business Intelligence Tools の CD-ROM をコンピュータの CD-ROM ドライブに挿入し、ルート・ディレクトリにある setup.exe を実行します。
 - **ダウンロード:** ダウンロード・ディレクトリから Disk1¥setup.exe を見つけて実行します。

インストール中に Windows システム・ファイルのエラーが検出された場合は、「OK」をクリックしてエラー・ダイアログを閉じます。その後、1.8.2 項の手順に従ってください。

3. 「ようこそ」画面で、Oracle Universal Installer に関する情報を確認し、「次へ」をクリックします。
4. 「ファイルの場所の指定」画面で、「ソース」のパスを確認し、「インストール先」の情報を指定します。コンピュータ上のディレクトリを移動するには、「参照」ボタンを使用します。
 - **ソース:** デフォルトを変更しないでください。これは products.xml ファイルまでのフルパスで、このファイルから製品がインストールされます。インストーラによって、インストール・プログラムの products.jar ファイルのデフォルト値が検出され、使用されます。
 - **インストール先:** 製品のインストール先となる Oracle ホーム・ディレクトリの名前とフルパスです。提示されたデフォルトの名前とパスを使用するか、別の名前を選択できます。Oracle ホームのパスは、実在する絶対パスでなければなりません。環境変数名やスペースを含めることはできません。Oracle ホーム・ディレクトリの選択手順は、1.6 項「1 つの Oracle ホーム・ディレクトリでの共存」を参照してください。

「次へ」をクリックして続行します。

5. 「インストール・タイプの選択」画面で、実行するインストールのタイプと、インストールする製品言語を選択します。選択できるインストール・オプションは次のとおりです。
 - **ビジネス・ユーザー:** このオプションを選択すると、OracleBI Spreadsheet Add-In がインストールされます。
 - **管理者/パワー・ユーザー:** このオプションを選択すると、OracleBI Discoverer Administrator がインストールされます。
 - **開発者:** このオプションをインストールすると、OracleBI Beans がインストールされます。
 - **カスタム:** このオプションを選択すると、「使用可能な製品コンポーネント」画面が表示されます。「次へ」をクリックすると、OracleBI Spreadsheet Add-In、OracleBI Discoverer Administrator、OracleBI Beans、OracleBI Discoverer Desktop の中から自由に組み合わせて選択できます。

OracleBI Discoverer の実行言語を選択するには、「**製品の言語**」をクリックして「言語の選択」画面を表示します。この画面から、グローバリゼーション・サポートに使用する複数の言語をインストールできます。NLS_LANG 環境変数を変更すると、コンポーネントを実行する前に言語を切り替えることができます。NLS_LANG で指定した言語の翻訳がインストールされている場合は、指定した言語でコンポーネントが表示されます。そうでない場合は、英語が使用されます。コンポーネントのインストール後に別の翻訳を追加するには、コンポーネントをアンインストールし、再インストールする必要があることに注意してください。詳細は、[2.2.2 項「コンポーネントの言語」](#)を参照してください。

「次へ」をクリックして続行します。

6. 「カスタム」インストール・タイプを選択した場合は、「使用可能な製品コンポーネント」画面が表示されます。インストールする製品コンポーネントを指定します。

「次へ」をクリックして続行します。

7. BI Beans をインストールする場合は（「開発者」および「カスタム」インストール・タイプの一部として選択可能）、「BI Beans をインストールする JDeveloper の場所の指定」画面が表示されます。

(JDeveloper の実行可能ファイルの場所ではなく) JDeveloper のインストール先ディレクトリまでのフルパスを指定します。JDeveloper がコンピュータにインストールされていないと、BI Beans はインストールされません。

8. 「サマリー」画面で選択内容を確認したら、「**インストール**」をクリックしてファイルのインストールを開始します。選択内容を変更する場合は、「**戻る**」をクリックして必要な画面に戻ります。

9. 「インストール」画面が表示され、Oracle Business Intelligence Tools に必要なファイルがコピーされます。この画面には、インストール・ログの場所も表示されます。

インストール・プロセスを中止するには、「**インストールの中止**」をクリックします。製品のインストール全体を中止することを確認するメッセージが表示されます。

10. 「Configuration Assistant」画面が表示され、次に Oracle Net Configuration Assistant の「ようこそ」ページが表示されます。「**次へ**」をクリックします。

11. Oracle Net Configuration Assistant の「完了」ページで、「**終了**」をクリックします。

12. 製品のインストールが完了すると、インストールの完了画面が表示されます。

インストール・プログラムを終了するには、「**終了**」をクリックします。インストール・プログラムを終了することを確認するメッセージ・ダイアログが表示されます。終了するには「**はい**」、インストール・プログラムを続行するには「**いいえ**」をクリックします。

製品のインストールが正常に終了したら、[2.2 項「インストール後の一般的な作業」](#)および [2.3 項「コンポーネント固有のインストール後の作業」](#)に進んでさらに手順を実行します。

2.2 インストール後の一般的な作業

次に示す一般的なインストール後のチェックリストを確認し、実際のインストールおよび環境に該当する作業を実行してください。

注意： 特に明示のないかぎり、`BIT_ORACLE_HOME` は、インストール時に使用した Oracle Business Intelligence Tools ホーム・ディレクトリを示します。

2.2.1 TNS 名

選択したインストール・タイプに応じて、`tnsnames.ora` および `sqlnet.ora` ファイルが `BIT_ORACLE_HOME/network/ADMIN` ディレクトリ (Windows) または `BIT_ORACLE_HOME/network/ADMIN` ディレクトリ (Linux, Solaris, HP-UX) にインストールされている場合があります。これらのファイルは、テキスト・エディタを使用して手動で更新するか、構成ツールの Oracle Net Configuration Assistant を使用して更新できます。構成ツールの詳細は、Oracle データベース・ドキュメント・ライブラリにある『Oracle Net Services 管理者ガイド』の各マニュアルを参照してください。

2.2.2 コンポーネントの言語

OracleBI Discoverer ユーザー・インタフェースは、インストール時に選択した任意の言語で表示できます。表示言語を設定するには、`NLS_LANG` 環境変数を設定します。

`NLS_LANG` によって、コンポーネントで使用される言語、地域依存の規則およびキャラクタ・セットが制御されます。`NLS_LANG` を別の値に変更するまで、OracleBI Discoverer ではその設定が使用されます。

`NLS_LANG` には、言語、地域およびキャラクタ・セットの3つの要素があります。これらは次のフォーマットで設定します。

< 言語 >_< 地域 >.< キャラクタ・セット >

たとえば、値 `Japanese_Japan.JA16EUC` を使用して `NLS_LANG` を設定すると、コンポーネントが日本語で実行され、日本の文化に合わせた規則が使用され、データ操作には EUC キャラクタ・セットが使用されます。

`NLS_LANG` の詳細は、『Oracle Application Server グローバリゼーション・ガイド』(Oracle Application Server のドキュメント・ライブラリに含まれる) を参照してください。

2.2.3 Windows のみ : アシスティブ・テクノロジー

Java ベースのアプリケーションやアプレットと連動するスクリーン・リーダーなどのアシスティブ・テクノロジーを使用する場合は、Oracle Business Intelligence Tools をインストールする Windows ベース・コンピュータ上のすべての Java Virtual Machine の場所に、Sun の Java Access Bridge をインストールしておく必要があります。Sun の Web サイト (<http://www.sun.com/>) から最新の Access Bridge テクノロジーをダウンロードおよびインストールしてください。

2.3 コンポーネント固有のインストール後の作業

コンポーネント固有のインストール後のチェックリストを確認し、必要な作業をすべて実行してください。

2.3.1 Spreadsheet Add-In

Spreadsheet Add-In のデータベース要件は BI Beans と同じです。アドインを使用する前に、[2.3.3.1 項「データベースに関する考慮事項」](#)の手順に従っていることを確認してください。

Spreadsheet Add-In に固有の、インストール後の要件は他にありません。

2.3.2 Discoverer Administrator

旧バージョンの Discoverer Administrator (旧称 Discoverer Administration Edition) がコンピュータ上にある場合は、Discoverer Administrator を使用して管理作業を実行する前に、End User Layer をアップグレードする必要があります。詳細は、Oracle Business Intelligence Tools のドキュメント・ライブラリにある『Oracle Business Intelligence Discoverer 管理ガイド』の第 24 章「以前のリリースの Discoverer からのアップグレード」を参照してください。

2.3.3 BI Beans

ユーザーの環境に適したインストール後の作業を実行します。次の点に注意してください。

- BI Beans カタログをインストールする前に、DBA ロール権限を使用してデータベース・ユーザーにアクセスする必要があります。
- JDeveloper のデータに接続する前に、Oracle Database をインストールおよび構成する必要があります。
- JDeveloper の準備手順は、埋込み OC4J インスタンスを含む JDeveloper 環境全体に影響します。

2.3.3.1 データベースに関する考慮事項

BI Beans では、Oracle9i Database または Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.3 以上) に格納されているデータがサポートされます。ただし、サポート対象となるのは特定のリリースおよびパッチのみです。

- Oracle9i Enterprise Edition リリース 2 (すべてのプラットフォームでの最新の OLAP パッチの場合は 9.2.0.6、Windows 専用の最新の OLAP パッチの場合は 9.2.0.5B。最新の 9.2.0.5 Windows パッチは 3952897 です。)
- Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.3 以上) および最新の OLAP パッチ (10.1.0.3B もしくは 10.1.0.4 以上)

2.3.3.1.1 BI Beans と併用する Oracle9i リリース 2 データベースの準備 Oracle9i リリース 2 と併用する場合は、次の作業を実行します。

1. Oracle Database 9i Enterprise Edition リリース 2 (すべてのプラットフォームでの最新の OLAP パッチの場合は 9.2.0.6、Windows 専用の最新の OLAP パッチの場合は 9.2.0.5B) をインストールします (まだインストールしていない場合)。手順の説明は、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) から該当するプラットフォームの Oracle9i のインストール・ガイドをダウンロードしてください。

注意: データベース・クライアントをインストールする際には、必ず別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。

2. 同じサーバー上で、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) から該当する Oracle9i OLAP パッチをダウンロードし、インストールします (まだインストールしていない場合)。

このマニュアルの作成時点で最新の 9.2.0.5B Windows パッチは 3952897 です。

Metalink からパッチをダウンロードする手順は、[2.3.3.1.3 項「最新の OLAP パッチのダウンロード」](#)を参照してください。

3. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に記載される構成設定に従って、データベースを構成します。このドキュメントにアクセスするには、パッチ・セット 2529822 をダウンロードします。BI Beans が正しく動作し、効率的に機能するためには、これらの構成設定に正確に従う必要があります。このドキュメントは必要に応じて更新されるため、新しいパッチ・セットをダウンロードする際には、新しいバージョンがないかどうかを確認してください。
4. 『Oracle9i OLAP ユーザーズ・ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このドキュメントは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) から入手できます。また、Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツール (メタデータの作成に使用するツール) のヘルプ・システムも参照できます。代替手段として、OracleBI Warehouse Builder を使用してメタデータを作成することも可能です。適切なメタデータを定義しないと、OLAP クエリーを作成できなくなります。

2.3.3.1.2 BI Beans と併用する Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.3 以上) の準備

Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.3 以上) と併用する場合は、次の作業を実行します。

1. Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.3 以上) をインストールします (まだインストールしていない場合)。手順の説明は、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) から該当するプラットフォームの Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 (10.1.0.3 以上) のインストーレーション・ガイドをダウンロードしてください。

注意: Linux、Linux Itanium および Solaris x86 プラットフォームの場合は、Oracle Technology Network からバージョン 10.1.0.3 をダウンロードし、インストールします。その他すべてのプラットフォームについては、最初にバージョン 10.1.0.2 をダウンロードしてから、10.1.0.3 の適切なパッチ・セットを適用する必要があります。

データベース・クライアントをインストールする際には、必ず別の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールしてください。

2. 同じサーバー上で、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) から該当する Oracle OLAP 10g パッチをダウンロードし、インストールします (まだインストールしていない場合)。

このマニュアルの作成時点で最新の Windows パッチ・セット番号は 4045047 です。

Metalink からパッチをダウンロードする手順は、2.3.3.1.3 項「最新の OLAP パッチのダウンロード」を参照してください。

3. 『Oracle OLAP 表キューブ集計と問合せ操作のベスト・プラクティス』に記載される構成設定に従って、データベースを構成します。BI Beans が正しく動作し、効率的に機能するためには、これらの構成設定に正確に従う必要があります。このドキュメントは必要に応じて更新されるため、新しいパッチ・セットをダウンロードするたびに、新しいバージョンがないかどうかを確認してください。このドキュメントにアクセスするには、パッチ・セット 3760779 をダウンロードします。
4. 『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』の説明に従って、適切な OLAP メタデータを定義します。このドキュメントは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology>) から入手できます。適切なメタデータを定義しないと、OLAP クエリーを作成できなくなります。次のいずれかのツールを使用して、メタデータを定義します。
 - Oracle Enterprise Manager の OLAP 管理ツール。詳細は、Oracle Enterprise Manager のヘルプ・システムを参照してください。
 - OracleBI Warehouse Builder。詳細は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
 - Analytic Workspace Manager。詳細は、『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

2.3.3.1.3 最新の OLAP パッチのダウンロード マルチディメンション・データソースのクエリー時には、特定のデータベース・リリースとパッチのみがサポートされます。詳細は、[1.5.1 項「Oracle Database」](#)を参照してください。

最新の OLAP パッチにアクセスする手順は、次のとおりです。

1. <http://metalink.oracle.com> で、OracleMetalink にログインします。
2. 「Patch」をクリックします。
3. 「Advanced Search」をクリックします。
4. 「Advanced Search」画面で、次のフィールドに入力します。
 - 「Product or Product Family」: 「Search」アイコンをクリックし、「Search in」フィールドから「Database & Tools」を選択します。「View All」をクリックします。検索結果リストから Oracle OLAP をクリックします。
 - Release: ドロップダウン・リストから適切なリリース番号を選択します。
 - Patch Type: 「Any」を選択します。
 - 「Platform or Language」: ユーザーの環境で使用しているプラットフォームを選択します。
 - 残りのフィールドは空白のままにします。

「Go」をクリックすると、パッチ・リストが表示されます。OLAP パッチは、パッチ名に「OLAP」という文字が含まれています。

2.3.3.2 その他の作業

データベースの準備の他、ユーザーの環境に応じて次の作業を行ってください。

- 移行の詳細は、[付録 B「既存の Oracle BI Beans プロジェクトの移行」](#)を参照してください。
- JDeveloper のデフォルトにより、JDK は `..¥..¥jdk` ディレクトリ (Windows) または `/usr/java/jdk1.4` ディレクトリ (Linux, Solaris, HP-UX) にあるものと想定されます。JDK がデフォルトの場所がない場合は、`BIT_ORACLE_HOME/jdev/bin/jdev.conf` を編集して、`SetJavaHome` オプションの設定を変更する必要があります。
- JDeveloper を使用して設計する際には、分析データがプロジェクトに保存されます。ただし、開発者またはエンド・ユーザーが、分析データやオブジェクトを他の開発者やエンド・ユーザーと共有できるようにする場合は、ヘルプ・トピックの BI Beans カタログのインストールおよび構成に関する項の説明に従って、BI Beans カタログをインストールおよび構成する必要があります。

重要: カタログをインストールする前に、[2.3.3.2.1 項「BI Beans カタログインストール時のブロック・サイズの確認」](#)を参照してください。

- アプリケーションをテストするには、選択したデプロイメント環境をインストールする必要があります。詳細は、ヘルプ・トピックのデプロイメント環境の要件に関する項を参照してください。
- BI Beans には、クライアント環境の構成を検証および報告するユーティリティが含まれています。この構成診断ユーティリティの目的は、構成に関する情報を収集して問題を診断することです。このユーティリティを使用すると、BI Beans、JDeveloper および Oracle Database のリリース番号などの情報が表示され、OLAP カタログのメタデータと照合した診断テストが実行されます。

詳細は、BI Beans ヘルプ・システムの BI Beans クライアント構成の検証に関する項を参照してください。

2.3.3.2.1 BI Beans カタログインストール時のブロック・サイズの確認 カタログをインストールする前に、データベースのブロック・サイズを判断する必要があります。ブロック・サイズに関する情報は、データベース管理者に問い合せてください。

分析用ワークスペースの推奨ブロック・サイズは 8KB のため、このサイズが使用されがちですが、状況によっては、このサイズでも不十分な場合があります。また、使用するキャラクタ・セットなどの各種要件によっては、2KB や 4KB 程度で十分な場合もあります。

適切なブロック・サイズでカタログをインストールするには、次の手順を実行します。

1. 次のいずれかを実行し、ブロック・サイズを設定します。
 - 適切なデータベース・ブロック・サイズを使用して、データベースを再構築します。
 - 適切なブロック・サイズを使用して、カタログのカスタム表領域を作成します。たとえば、ブロック・サイズ 8K で BIBCATIDX という名前の表領域を作成するには、次のようなコマンドを使用します。

```
CREATE TABLESPACE BIBCATIDX DATAFILE 'file_1.f'
SIZE 128M BLOCKSIZE 8192 EXTENT MANAGEMENT LOCAL
UNIFORM SIZE 128K
```

2. カタログをインストールします。手順 1 でカスタム表領域の作成を選択した場合は、`bi_installcatalog script` の実行時に `-ti` パラメータの値として、この表領域名を使用します。

ブロック・サイズが不十分な場合は、カタログのインストール時に、次のようなエラー・メッセージが表示される可能性があります。

ORA-01450: キーが最大長 (*number*) を超えました

ここで、*number* は 1478 などの整数を表します。このエラー・メッセージは、カタログの作成中に、最大許容値を超えるキー・サイズで索引を作成しようとしたことを意味します。キー・サイズは複数のブロックにまたがることができないため、索引のキー・サイズはデータベースまたは表領域のブロック・サイズ値による制限を受けます。

2.3.4 Discoverer Desktop

ユーザーは Discoverer Desktop の使用を開始する前に、Oracle Business Intelligence Tools の CD で提供されるバージョンの Discoverer Administrator で作成（またはアップグレード）された、EUL へのアクセス権を持っている必要があります。

2.4 ユーザー・ドキュメントへのアクセス

すべてのコンポーネントには、製品とともにインストールされたオンライン・ヘルプが備わっています。また、コンポーネントによっては追加ドキュメントが提供されています。これらのドキュメントは、次の方法で入手できます。

- Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/products/bi>)。このサイトでは、ホワイト・ペーパーや最新版ドキュメントなどの資料も提供されています。
- Oracle Business Intelligence Tools のソフトウェア CD、DVD またはダウンロード (doc ディレクトリ内)。提供されている全ドキュメントの概要は、Web ブラウザで `¥Disk1¥doc¥index.htm` ファイルを参照してください。

提供されているユーザー・マニュアルおよび部品番号のリストは、viii ページの「[関連ドキュメント](#)」を参照してください。

Oracle Business Intelligence Tools のスタート・ガイドを利用するには、「スタート」メニューから「プログラム」→「OracleBI Tools - BIT_ORACLE_HOME」→「ようこそ」ページの順に選択します。「ようこそ」ページでは、Quick Tour、Samples、Oracle By Example Tutorials などのリソースや、Oracle Technology Network サイトにあるその他のリソースが紹介されています。

2.5 コンポーネントの起動

Oracle Business Intelligence Tools コンポーネントを起動する前に、前述の各項の説明に従って、一般のおよびコンポーネント固有のインストール後の作業を完了していることを確認してください。

コンポーネントのインストール後の手順とアップグレード手順を完了したら、次の説明に従ってコンポーネントを起動します。

2.5.1 Spreadsheet Add-In

Microsoft Excel の設定は、インストーラによって自動的に行われます。Spreadsheet Add-In を使用するには、Microsoft Excel を起動し、「OracleBI」メニューから OLAP 機能にアクセスします。

Microsoft Excel を起動しても「OracleBI」メニューが表示されない場合は、アドインを手動でインストールする必要があります。

Spreadsheet Add-In を手動でインストールする手順は、次のとおりです。

1. Microsoft Excel の「ツール」メニューから、「アドイン」を選択します。
2. リスト内で Spreadsheet Add-In が選択されていることを確認します。
3. リスト内で Spreadsheet Add-In が選択されていない場合は、「参照」を選択し、`BIT_ORACLE_HOME` ディレクトリの `add-in` サブディレクトリ (`oraolapxl`) から `OLAP4XL.xla` ファイルを選択します。

2.5.2 Discoverer Administrator

Windows で Discoverer Administrator を起動する手順は、次のとおりです。

1. タスクバーから、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Business Intelligence Tools - `BIT_ORACLE_HOME`」→「Discoverer Administrator」の順に選択し、Discoverer Administrator に接続ダイアログを表示します。
2. 「ユーザー名」フィールドに、Discoverer Administrator を起動するデータベース・ユーザーのユーザー名を入力します。
3. 「パスワード」フィールドに、Discoverer Administrator を起動するデータベース・ユーザーのパスワードを入力します。
4. 次のガイドラインに従って、「接続」フィールドに接続先データベースを指定します。
 - デフォルトの Oracle データベースにログオンする場合は、「接続」フィールドに何も入力しないでください。
 - 別の Oracle データベースにログオンする場合は、データベース名を指定します（使用する名前が不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください）。
5. 「接続」をクリックし、Discoverer Administrator を起動してデータベースに接続します。

2.5.3 BI Beans（および Oracle JDeveloper）

BI Beans で作業をするには、JDeveloper を実行します。

- **Windows の場合:** JDeveloper を起動するには、プログラム `BIT_ORACLE_HOME\jdev\bin\jdevw.exe` を実行します。メッセージを確認できるように、コンソール・ウィンドウを表示した状態で JDeveloper を実行する場合は、`BIT_ORACLE_HOME\jdev\bin\jdev.exe` を実行します。

2.5.4 Discoverer Desktop

Discoverer Desktop でワークブックを新規作成したり、既存のワークブックを開くには、End User Layer が事前に存在（つまり Discoverer Administrator を使用して作成）している必要があります。

Windows で Discoverer Desktop を起動する手順は、次のとおりです。

1. タスクバーから、「スタート」→「すべてのプログラム」→「Oracle Business Intelligence - BIT_ORACLE_HOME」→「Desktop」の順に選択し、Discoverer Desktop に接続ダイアログを表示します。
2. 「ユーザー名」フィールドに、Discoverer Desktop を起動するデータベース・ユーザーのユーザー名を入力します。
3. 「パスワード」フィールドに、Discoverer Desktop を起動するデータベース・ユーザーのパスワードを入力します。
4. 次のガイドラインに従って、「接続」フィールドに接続先データベースを指定します。
 - デフォルトの Oracle データベースにログオンする場合は、「接続」フィールドに何も入力しないでください。
 - 別の Oracle データベースにログオンする場合は、データベース名を指定します（使用する名前が不明な場合は、データベース管理者に問い合わせてください）。
5. 「接続」ボタンをクリックし、Discoverer Desktop を起動してデータベースに接続します。

2.6 次の作業

インストールが完了した後、次の作業に進みます。

- 「ようこそ」ページから、Oracle Business Intelligence Tools の概要を確認します。「ようこそ」ページにアクセスするには、`BIT_ORACLE_HOME\bi\index.htm` を起動します。
- 『Oracle Business Intelligence 概要』マニュアルに目を通します。手順の説明は、2.4 項「ユーザー・ドキュメントへのアクセス」を参照してください。
- コンポーネント固有のユーザー・ドキュメントに目を通します。手順の説明は、2.4 項「ユーザー・ドキュメントへのアクセス」を参照してください。
- Oracle Business Intelligence Tools の使用を開始します。手順の説明は、2.5 項「コンポーネントの起動」を参照してください。

Oracle Business Intelligence Tools の アンインストールおよび再インストール

この章では、Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール手順について説明します。複数またはすべてのコンポーネントをアンインストールする場合、必ずこの章に示す順序に従ってください。

この章では、実行する順序どおりにアンインストール手順を示しています。

- 3.1 項「[Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール](#)」 3-2 ページ
- 3.2 項「[Oracle Business Intelligence Tools の再インストール](#)」 3-3 ページ

3.1 Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール

コンピュータから Oracle Business Intelligence Tools を削除するには、必ず Oracle Universal Installer を使用します。次の項では、アンインストール・プロセスを順に説明します。

Windows の場合、アンインストールの前にすべての Oracle サービスを終了します。Linux、Solaris および HP-UX の場合、アンインストールの前にすべての Oracle プロセスを停止します。

Oracle Technology Network から JDeveloper をダウンロードおよびインストールした場合、Oracle Universal Installer を使用して JDeveloper をアンインストールできないため注意してください。

インストーラを使用して Oracle Business Intelligence Tools をアンインストールする手順は、次のとおりです。

1. 2.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」の手順 1 および 2 の指示に従ってインストーラを起動します。

インストーラにより、このコンピュータにインストールされているすべての Oracle 製品が表示され、不要な製品をアンインストールできます。この章の指示は、Oracle Business Intelligence Tools を中心に説明しています。

Oracle Business Intelligence Tools の個々のコンポーネントはアンインストールできません。コンポーネントを 1 つのみ選択した場合でも、インストーラにより Oracle Business Intelligence Tools スイート全体が削除されます。

2. Oracle Universal Installer の「ようこそ」画面で、「製品の削除」または「インストールされた製品」をクリックします。

3. 「インベントリ」画面でインストール済製品のリストを確認してから、**Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 (10.1.2.0.0)** を選択します。

可能な場合、製品名の前にあるプラス (+) またはマイナス (-) 記号により、その製品の従属コンポーネントおよびファイルのリストを開閉できます。

4. Oracle Business Intelligence Tools の横の「場所」をクリックし、「場所」ボックスに表示された場所のフルパスをメモします。この情報は、インストーラの完了後、ファイルおよびフォルダを手動で削除する場合に必要となります。

5. 続行する準備ができたなら、「削除」をクリックします。

6. 「確認」画面で選択内容を確認し、「はい」をクリックしてアンインストール・プロセスを開始します。

または、選択内容を変更する必要がある場合、「いいえ」をクリックして「インベントリ」画面に戻ります。

インストーラに、アンインストール・プロセスを監視するための「削除」プログレス・バーが表示されます。アンインストールを停止する場合は、「取消」をクリックし、アンインストールの停止の確認を求めるプロンプトが表示されたら「はい」をクリックします。

7. アンインストール後、インストーラに再度「インベントリ」画面が表示されます。「閉じる」をクリックしてこの画面を閉じ、「ようこそ」画面に戻ります。

8. 「ようこそ」画面で、「取消」をクリックしてインストーラを終了した後、「はい」をクリックして終了を確認します。

9. ファイルおよびフォルダが残っている場合は手動で削除する必要があります。手順 4 でメモした場所に移動し、ファイルおよびフォルダを削除します。

10. **Windows の場合のみ:** コンピュータを再起動します。

これで Oracle Business Intelligence Tools のアンインストールが正常に完了しました。

3.2 Oracle Business Intelligence Tools の再インストール

インストーラでは、Oracle Business Intelligence Tools の既存のインストールを追加コンポーネントによりアップグレードできます。そのためには、[2.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」](#)の手順 1 および 2 の指示に従ってインストーラを再度起動し、必要なコンポーネントが含まれるインストール・タイプを選択します。

インストーラでは、既存のコンポーネント・インストールは上書きされません。Oracle Business Intelligence Tools を完全に再インストールするには、まず [3.1 項「Oracle Business Intelligence Tools のアンインストール」](#)の指示に従って製品を完全にアンインストールしてから、[第 2 章「Oracle Business Intelligence Tools のインストール」](#)の指示に従って製品をインストールする必要があります。

A

トラブルシューティング

この付録には、インストールでエラーまたは問題が発生した場合に使用するリファレンス情報が含まれます。この付録の項目は次のとおりです。

- [A.1 項「開始する前に」](#) A-2 ページ
- [A.2 項「インストールのトラブルシューティング」](#) A-2 ページ

A.1 開始する前に

Oracle Business Intelligence Tools のインストールの問題を修正する前に、次の項目を確認することをお勧めします。

- [ハードウェア要件およびインストール前の要件の確認](#)
- [リリース・ノートの内容の把握](#)

A.1.1 ハードウェア要件およびインストール前の要件の確認

最初に、Oracle Business Intelligence Tools のハードウェアおよびソフトウェア要件とインストール前の作業を確認します。

- [1.3 項「ハードウェア要件」](#) で指定しているハードウェア要件をコンピュータが満たしていることを確認します。
- ソフトウェアの動作環境が [Oracle Business Intelligence Tools 10g リリース 2 \(10.1.2.0.0\)](#) でサポートされていることを確認します。サポートされる動作環境のリストは、[1.4 項「動作環境および必要なパッチ」](#) を参照してください。
- サポートされるソフトウェア動作環境が、[1.4 項「動作環境および必要なパッチ」](#) で指定しているソフトウェア要件を満たしていることを確認します。
- [1.7 項「インストール前の作業」](#) の冒頭で指定している製品レベルのインストール前の作業をすべて完了していることを確認します。
- インストールするコンポーネントのコンポーネントレベルのインストール前の作業をすべて完了していることを確認します。これらの作業は [1.7.5 項「コンポーネント固有のインストール前の作業」](#) に示しています。

A.1.2 リリース・ノートの内容の把握

インストール前に、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』に目を通すことをお勧めします。このリリース・ノートは、Oracle Technology Network (<http://www.oracle.com/technology/products/bi/index.html>) で提供しています。

A.2 インストールのトラブルシューティング

Oracle Business Intelligence Tools のインストール中にエラーが発生した場合、次の手順を実行します。

- **インストーラを終了しない:** インストーラを実行したままにすると、インストール・ログ・ファイルがより簡単に見つかります。
- **誤った情報:** いずれかのインストール画面に誤った情報を入力した場合は、「戻る」をクリックしてその画面まで戻り、情報を訂正してインストールを続行します。
- **コピーまたはリンクのエラー:** ファイルのコピーまたはリンク付け中にインストーラによりエラーが報告された場合、次の手順を実行します。
 1. エラーをメモしてから、原因についてインストール・ログを確認します。インストール・ログは、Oracle インベントリ・ディレクトリのログ・サブディレクトリ内にあり、ファイル名は次のとおりです。
 - `installActionstimestamp.log`
 - `oraInstalltimestamp.err`
 - `oraInstalltimestamp.out`

文字列 `timestamp` は、インストールの開始時にインストーラによってファイル名に追加される値であり、書式は `yyyy-mm-dd_hh-mm-ss[AM|PM]` となります。

`oracle_inventory` ディレクトリの場所は、コンピュータに Oracle 製品を最初にインストールするときに指定します。

2. 第3章「Oracle Business Intelligence Tools のアンインストールおよび再インストール」の指示に従って、失敗したインストールを削除します。
 3. エラーの原因となった問題を訂正します。
 4. Oracle Business Intelligence Tools のインストールを再度開始します。
- **BI Beans との接続の問題**: BI Beans には、クライアント環境の構成を検証および報告するユーティリティが含まれています。この構成診断ユーティリティの目的は、構成に関する情報を収集して問題を診断することです。このユーティリティを使用すると、BI Beans、JDeveloper および Oracle Database のリリース番号などの情報が表示され、OLAP カタログのメタデータと照合した診断テストが実行されます。

詳細は、BI Beans ヘルプ・システムの BI Beans クライアント構成の検証に関する項を参照してください。

既存の Oracle BI Beans プロジェクトの移行

この付録では、Oracle9i JDeveloper (9.0.4) からの既存の Oracle BI Beans プロジェクトの移行手順を説明します。この付録の項目は次のとおりです。

- [B.1 項「Oracle OLAP インスタンスの移行 \(オプション\)」](#) B-2 ページ
- [B.2 項「Oracle BI Beans カタログの移行」](#) B-2 ページ
- [B.3 項「旧リリースからのユーザー設定の移行」](#) B-2 ページ
- [B.4 項「Oracle BI Beans ワークスペースの移行」](#) B-3 ページ

B.1 Oracle OLAP インスタンスの移行（オプション）

その他の移行手順を実行する前に、次のリストの説明に従って、使用するデータベース・バージョンを決定する必要があります。

- アプリケーションを Oracle9i リリースで実行する場合は、Oracle9i リリース 1 (9.0.1) で動作する既存のアプリケーションをアップグレードする前に、Oracle9i Database リリース 2 のインストレーション・ガイドの説明に従って、最初にデータベースを Oracle9i リリース 2 にアップグレードします。すべてのプラットフォームの場合、最新の OLAP パッチはリリース 9.2.0.6、Windows のみ最新の OLAP パッチはリリース 9.2.0.5 を使用していることを確認します。最新の 9.2.0.5 Windows パッチは 3952897 です。
- アプリケーションを Oracle Database 10g Enterprise Edition リリース 1 で実行する場合は、その他の移行作業を実行する前に、Oracle OLAP インスタンスを Oracle Database 10g に移行します。Oracle OLAP の移行の詳細は、Oracle Database 10g リリース用の『Oracle OLAP アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

B.2 Oracle BI Beans カタログの移行

リモート Oracle BI Beans カタログを移行するには、Oracle BI Beans に付属するアップグレード・ユーティリティを実行します。次のリストは、ユーティリティの名前および場所を示しています。JDEV_HOME は、JDeveloper がインストールされているディレクトリです。

- MS Windows XP/2000 では、ユーティリティ名は bi_upgradecatalog.bat であり、JDEV_HOME\bibeans\bin ディレクトリに格納されています。
- Sun Solaris (SPARC) では、ユーティリティ名は bi_upgradecatalog.csh であり、JDEV_HOME/bibeans/bin ディレクトリに格納されています。

重要: アップグレード・ユーティリティは、Oracle BI Beans リリース 9.0.3 または 9.0.4 から Oracle BI Beans リリース 10.1.2 へのアップグレードでのみ実行できます。必ず、最新バージョンの Oracle BI Beans に付属するユーティリティを実行してください。

カタログの移行ユーティリティの詳細は、Oracle BI Beans ヘルプ・システムの Oracle BI Beans カタログのアップグレード・ユーティリティに関するヘルプ・トピックを参照してください。

B.3 旧リリースからのユーザー設定の移行

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) のリリースから Oracle JDeveloper10g にユーザー設定を移行できます。初めて Oracle JDeveloper10g を開いたときに、ユーザー設定を旧バージョンから移行するよう求めるプロンプトが表示されます。デフォルトでは、すべての設定が移行するようにマーク付けされています。ユーザー設定、特にデータベース接続のアップグレードを許可する必要があります。データベース接続が移行されていない場合、移行するいずれかのワークスペースに存在する、BIDesigners により参照される接続を再作成する必要があります。

Oracle では、Oracle JDeveloper リリース 3.2.3 から Oracle9i JDeveloper (9.0.4) 以上への直接移行はサポートされていません。

B.4 Oracle BI Beans ワークスペースの移行

プロジェクトを移行するには、次の手順を実行します。

1. ワークスペースを移行する前に、これらのワークスペースのバックアップ・コピーを作成します。
2. [B.3 項「旧リリースからのユーザー設定の移行」](#)の説明に従ってデータベース接続を自動的に移行しなかった場合、続行する前にこれらの接続を移行します。Oracle JDeveloper10gで、「接続ナビゲータ」を表示し、「データベース」を右クリックして、「接続のインポート」を選択します。

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) の接続を使用する BIDesigner を開く前に、必ずこの手順を完了してください。

3. JDeveloper でプロジェクトを移行します。

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) で作成されたワークスペース、または Oracle JDeveloper10g のワークスペースに追加する Oracle9i JDeveloper (9.0.4) で作成されたプロジェクトを移行する必要があります。Oracle JDeveloper10g を起動し、Oracle9i JDeveloper (9.0.4) の Oracle BI Beans ワークスペースを開くと、「移行ウィザード」が表示されます。このウィザードでは、多くの移行手順を自動的に実行できます。たとえば、このウィザードにより、ワークスペースが適切な Oracle JDeveloper10g バージョンに更新されます。UIX のインストール可能なファイルおよび HTML アプリケーションのデータ・バインド構文の更新など、適宜その他のオプションを自動的に実行できます。

ウィザードにより、任意のローカル・カタログを自動的に移行できます。ウィザードでは、移行前にカタログをバックアップするかどうかも指定できます。特定のローカル・カタログを移行しない場合は、ウィザードでそれらのカタログを選択解除できます。リモート・カタログのアップグレードの詳細は、[B.2 項「Oracle BI Beans カatalogの移行」](#)を参照してください。

4. 自動アップグレードが完了したら、「コンパイラ」オプションで「非推奨を指摘」を選択し、置換が必要な推奨されないクラスまたはタグを識別するようアプリケーション・コードをコンパイルし、表示されたエラーを修正します。
5. 次の行を削除してプロジェクト設定を編集し、このオプションが設定されていないことを確認します。このオプションが設定されていると、JDeveloper では新規バージョンではなく旧バージョンの JDBC が使用されます。

```
-Djava.ext.dirs=C:\¥Jdev¥JDev904_2.7.5.32.1¥jdev¥lib¥patches
```

6. 所有するアプリケーションの種類に応じて、次の各項で説明する適切な手順を実行します。
 - [B.4.1 項「JSP アプリケーションの手動移行手順」](#)
 - [B.4.2 項「UIX アプリケーションの手動移行手順」](#)
 - [B.4.3 項「Java クライアント・クラス・アプリケーションの手動移行手順」](#)
 - [B.4.4 項「Java サーブレット・アプリケーションの手動移行手順」](#)

ヒント: 手動の移行手順に関する最新情報は、『Oracle Business Intelligence Tools リリース・ノート』を参照してください。

B.4.1 JSP アプリケーションの手動移行手順

JSP アプリケーションについては、次の各項で説明する手動移行手順を実行します。

B.4.1.1 ネームスペースの更新

各ページのコードの 1 行目にあるネームスペースを編集します。次の例に示すように、既存のネームスペースに「/jsp」を追加します。

編集前:

```
<% taglib uri="http://xmlns.oracle.com/bibeans" prefix="orabi" %>
```

編集後:

```
<% taglib uri="http://xmlns.oracle.com/bibeans/jsp" prefix="orabi" %>
```

B.4.1.2 新規 BI JSP タグ機能へのアクセス

このリリースの Oracle BI Beans に新規に追加された JSP タグ機能にアクセスするには、次の手順を実行する必要があります。

1. 移行アプリケーションのすべての JSP ページの最上部に、次のテキストを追加します。


```
<@ taglib uri="http://java.sun.com/jstl/core" prefix="c"%>
```
2. 次の手順を実行して、JSTL タグ・ライブラリがプロジェクトに含まれることを確認します。
 - a. <project>%public_html%WEB-INF%lib ディレクトリをチェックし、ここに standard.jar ファイルが含まれるかどうかを確認します。含まれない場合は、手順 b および c を実行します。
 - b. 移行プロジェクトで任意の JSP ページを開きます。「コンポーネント・パレット」で、JSTL コアを選択します。out タグをページにドラッグします。タグ・エディタで「OK」を選択します。
 - c. JSP ページで、<c:out></c:out> タグを検索し、削除します。


```
<project>%public_html%WEB-INF%lib ディレクトリを再度チェックします。  
このディレクトリに standard.jar ファイルが存在する必要があります。
```

B.4.1.3 <body> タグの更新

BIThinSession タグが含まれる各ページで HTML <body> タグを更新します。ネームスペースを編集した後、BIBody タグおよび InitBITags タグを更新する必要があります。BIBody タグは、ビジュアル・エディタに表示されている場合、ページ上でドラッグ・アンド・ドロップできます。InitBITags タグは、フォームの 1 つ目の子としてドラッグ・アンド・ドロップできます。

ドラッグ・アンド・ドロップ技術が無効である場合、次の手順で説明するように、タグを手動で編集できます。

1. <body> タグを削除し、その場所に、必須の BI タグである BIBody (HTML <form> タグの前) および InitBITags (HTML <form> タグの後) を挿入します。
2. <form> のアクション属性を JSP ページ名に設定します。
3. メソッド属性を POST に設定します。
4. InitBITags の parentForm 属性を <form> の名前に設定します。

次のコードは、biexplorerdetail1.jsp というページにおけるこれらのタグの例を示しています。

```
<orabi:BIBody>  
<form name="BIForm" method="POST" action="biexplorerdetail1.jsp" >  
<orabi:InitBITags parentForm="BIForm"/>
```

注意: JSP ページ名の指定にスラッシュがないことを確認してください。さらに、終了タグ </body> を </orabi:BIBody> に置き換えてください。

B.4.1.4 プレゼンテーションにアクセスしたコードの更新

アプリケーションに JSP ページの scriptlet が含まれる場合、または ID によりプレゼンテーションにアクセスし、このプレゼンテーションを `ThinDataViewCommon` にキャストした Java コードが含まれる場合、このプレゼンテーションをプレゼンテーション Bean にキャストし、この Bean からデータ・ビューを取得する必要があります。

このためには、次のようなコード行を変更し、

```
ThinDataViewCommon dataView =
(ThinDataViewCommon)pageContext.findAttribute
("biuntitled1_pres1");
```

次のようにします。

```
ThinDataViewCommon tdvc = null;
Presentation p = (Presentation)pageContext.findAttribute
("biuntitled1_pres1");
if (p != null)
    tdvc = p.getView();
```

新規プレゼンテーション Bean にアクセスするには、次のインポートを追加します。
`oracle.dss.thin.beans.dataView.Presentation;`

B.4.1.5 SaveButton JSP タグの更新

SaveButton JSP タグは SaveLink タグで置き換えられました。アプリケーションで SaveButton JSP タグが使用されている場合、次の手順を実行してアプリケーションを更新できます。

1. `BIThinSession` で、次のような SaveButton タグを検索します。

```
<orabi:SaveButton id="analyze1_SaveButton1"
presentationId="analyze1_Presentation1"
saveConfirmationPage="saveconf1.jsp"
saveConfirmationId="saveconf1_SaveConfirmation1" />
```

次の例に示すように、SaveLink タグを使用するよう SaveButton タグを変更します。

```
<orabi:SaveLink id="analyze1_SaveButton1" mode="Save"
presentationId="analyze1_Presentation1" />
```

2. SaveButton タグの Render タグを変更します。たとえば、次のような Render タグがあるとします。

```
<orabi:Render targetId="analyze1_SaveButton1" parentForm="BIForm"/>
```

Render タグを次のように編集します。

```
<orabi:Button text="Save" onClick="{analyze1_SaveButton1_
data.showDialog}"/>
```

ユーザーが「保存」ボタンをクリックすると、内部の保存ページが表示されます。

B.4.2 UIX アプリケーションの手動移行手順

UIX アプリケーションについては、次の各項で説明する手動移行手順を実行します。これらの手順では、BI Beans によりカスタム・アプリケーションの基盤として生成された UIX アプリケーションを使用したことを前提としています。

B.4.2.1 イメージのパスの更新

ワークスペースにイメージが含まれる場合、次の手順の説明に従って、イメージをコピーし、BIPageTemplate UIT ファイルおよびログイン UIX ファイル内のイメージのパスを更新する必要があります。

1. BIPageTemplate UIT ファイルおよびログイン UIX ページ内のすべてのイメージのソース・パスを更新します。Oracle9i JDeveloper (9.0.4) では、イメージは `public_html¥cabo¥images¥<app_name>` ディレクトリに格納されます。Oracle JDeveloper10g では、イメージは `public_html¥<app_name>` ディレクトリに格納されます。

たとえば、このディレクトリの指定は、UIT ファイル内の次のようなタグで行われます。
`<images source="cabo¥images¥<app_name>¥required.gif">`

このタグを次のように変更します。

`<images source="<app_name>¥required.gif">`

2. アプリケーションでカスタム・イメージが使用される場合、手順 1 で指定したように、Oracle JDeveloper10g の該当するディレクトリにイメージをコピーします。

B.4.2.2 エラー・ページの更新

移行中、UIX アプリケーションのエラー・ページにおける問題を説明したメッセージが表示される場合があります。この問題を解決するには、次のいずれかの操作を実行します。

- Oracle BI Beans 10.1.2 により自動的に提供されるデフォルトのエラー・ページを使用する場合は、プロジェクトを Oracle BI Beans 10.1.2 に移行する前に、既存のエラー・ページを削除します。
- デフォルトのエラー・ページがカスタマイズ済であり、変更内容を保持する必要がある場合は、移行する前に `<bibeans:biPageTemplate>` 要素を編集し、`renderLogoutButton` 属性を削除します。たとえば、要素が次のように表示されているとします。

```
<bibeansTemplate:biPageTemplate
  xmlns="http://xmlns.oracle.com/uix/ui"
  xmlns:data="http://xmlns.oracle.com/uix/ui"
  xmlns:ctrl="http://xmlns.oracle.com/uix/controller"
  renderLogoutButton="false"
  renderOpenButton="false"
  pageTitle="BI uiXML Application Error">
```

要素を編集し、次のテキストを削除します。

```
renderLogoutButton="false"
```

要素を編集した後、web.xml ファイルを変更します。エラー・ページのエントリは次のように表示されます。

```
<init-param>
  <param-name>oracle.cabo.servlet.errorPage</param-name>
  <param-value>cabo/bi/uix/error</param-value>
</init-param>
```

値 `cabo/bi/uix/error` を変更し、カスタマイズしたエラー・ページを指すようにします。

B.4.2.3 部分ページ・レンダリングの要素の追加

部分ページ・レンダリング (PPR) 機能を使用するテンプレート・ページを編集する必要があります。次の例に示すように、<body> 要素をアプリケーション・コードに追加します。

```
<contents>
  <body>
    <contents>
      <form name="form1" method="POST">
        <contents>
```

</body> タグを必ず適切な場所に追加してください。

B.4.2.4 dialogLinkDef 要素ごとのコードの追加

Oracle JDeveloper10g で、ボタン、リンクまたはイメージの onClick 属性に dialogLink をバインドするには、キー showDialog により dialogLink の dataObject にバインドする必要があります。たとえば、dialogLink の ID が dlgLnk1 であり、BThinSession、bisession1 で定義されているとします。

Oracle9i JDeveloper (9.0.4) では、コードは次のようになります。

```
<button onClick="{bibeans:data().bisession1.dlgLnk1}"/>
```

Oracle JDeveloper10g では、コードは次のようになります。

```
<button onClick="{bibeans:data().bisession1.dlgLnk1_
data.showDialog}"/>
```

B.4.2.5 プレゼンテーションにアクセスしたコードの更新

ID によりプレゼンテーションにアクセスし、このプレゼンテーションを ThinDataviewCommon にキャストする Java コードがアプリケーションに含まれる場合、このプレゼンテーションをプレゼンテーション Bean にキャストし、この Bean からデータ・ビューを取得する必要があります。

このためには、次のようなコード行を変更し、

```
ThinDataviewCommon dataview =
  (ThinDataViewCommon) pageObjects.get("<parameter>");
```

次のようにします。

```
Presentation presentation =
  (Presentation) pageObjects.get("<parameter>");
ThinDataviewCommon dataview = null;
if (presentation !=null)
  dataview=presentation.getView();
```

旧バージョンの UIX アプリケーションの Java コードには、このコード変更を加える必要がある 2 つのインスタンスがあります。

新規プレゼンテーション Bean にアクセスするには、次のインポートを追加します。

```
oracle.dss.thin.beans.dataView.Presentation;
```

B.4.2.6 SaveDef UIX タグの更新

現行リリースでは、saveConfirmation タグは推奨されないため、SaveDef UIX タグに置き換えられています。saveConfirmation ページではなく、自動的に提供される内部の保存ダイアログ・ページを使用する必要があります。

たとえば、コードの元の行は次のようになります。

```
<bibeans:saveDef id="saveBtn1"
presentationId="pres1"
saveConfirmationPage="SaveConfirm1.uix"
saveConfirmationId="saveConf1" />
```

コードを次の行のようにリライトします。

```
<bibeans:saveDef id="saveBtn1" presentationId="pres1"
  mode="Save" />
```

ユーザーが「保存」ボタンをクリックすると、内部の保存ページが表示されます。

B.4.3 Java クライアント・クラス・アプリケーションの手動移行手順

Java クライアント・クラスを使用するアプリケーションについては、次の各項で説明する手動移行手順を実行します。

B.4.3.1 グラフのコード変更

アプリケーションにグラフを使用する場合、次のコード変更を加える必要があります。コードの次の行を変更します。

```
((GraphLayout) layout).setGraph((UIGraph) dv);
```

次のようにします。

```
((GraphLayout) layout).setGraph((Graph) dv);
```

B.4.4 Java サーブレット・アプリケーションの手動移行手順

サーブレット・アプリケーションを移行する前に、多くのカスタム・ページまたは機能を追加したかどうかを確認します。カスタマイズをそれほど追加していない場合は、JSP または UNIX アプリケーションを生成し、そこでカスタマイズを再作成する必要があります。JSP または UNIX アプリケーションに切り替えることで、Oracle BI Beans の強力な新機能を簡単に利用できます。

サーブレット・アプリケーションを移行する場合は、次の各項で説明する手動移行手順を実行します。

B.4.4.1 サーブレット・アプリケーションの Cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルの更新

JSP または UNIX アプリケーションを移行すると、cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルが自動的に更新されます。これらのインストール可能ファイルは、サーブレット・アプリケーションでは自動的に更新されません。cabo ディレクトリには、UNIX および Oracle BI Beans のイメージ、スタイル・シートおよび Javascript ファイルが含まれており、これらのファイルは Oracle9i JDeveloper (9.0.4) から Oracle JDeveloper10g へ更新されています。サーブレット・アプリケーションの cabo ディレクトリ内のインストール可能ファイルを更新するには、次の手順を実行します。

1. アップグレードするプロジェクトの public_html ディレクトリに移動します。
2. cabo ディレクトリの名前を cabo.9.0.4 に変更します。
3. サーブレット・アプリケーションの場合と同じ BIDesigner を使用して、UNIX または JSP ページを新規作成します。

ページが生成されると、プロジェクトの cabo ディレクトリが新規作成されます。

4. 旧ディレクトリ (cabo.9.0.4) に、その他のファイル (新規スタイル・シート、.xss ファイルまたはアプリケーション固有のイメージ・ファイルを作成した場合など) が格納されていた場合、これらのファイルを新規 cabo ディレクトリにコピーする必要があります。
5. (オプション) 作成された新規ページを安全に削除できます。

B.4.4.2 サブレット・アプリケーションのサンプルの参照

Oracle BI Beans には、サブレット・アプリケーション・サンプルのセットが付属しています。Oracle JDeveloper10g でのサブレット・アプリケーションの操作に関する推奨事項については、これらのサンプルを参照してください。たとえば、ViewToolbar に影響するコードを参照し、これに従ってアプリケーション・コードを変更します。ViewToolbar には下位互換性はありません。

索引

A

Americans with Disabilities Act (ADA) 準拠, vi

B

BI Beans

- BI Beans の概要, 1-2
- BI Beans 用の Oracle Database の設定, 2-5
- Oracle9i JDeveloper からのプロジェクトの移行, B-1
- インストール後の作業, 2-5
- インストール前の要件, 1-9
- 起動, 2-9
- 接続の問題、トラブルシューティング, A-3
- ソフトウェア要件、JDeveloper, 1-5

BI_ORACLE_HOME ディレクトリ

- 指定, 2-2
- 選択, 1-6

Business Intelligence (BI)

- OracleBI Tools, 1-2

C

CPU

- インストール要件, 1-4

D

Discoverer Administrator

- インストール後の作業, 2-5
- 概要, 1-2
- 起動, 2-9

Discoverer Desktop

- Discoverer Desktop の概要, 1-3
- インストール後の作業, 2-8
- 起動, 2-10
- 必要なメモリー, 1-4

E

Excel

- 「Microsoft Excel」を参照

J

Java Access Bridge

- インストール、Windows, 1-8

Java Virtual Machine (JVM)

- ロケールの設定, 1-8

JDeveloper

- BI Beans のサポート対象バージョン, 1-5
- Oracle9i JDeveloper からの BI Beans プロジェクトの移行, B-1

M

MetaLink, ix

Microsoft Excel

- Spreadsheet Add-In, 1-2
- Spreadsheet Add-In のサポート対象バージョン, 1-6

Microsoft Windows

- 「Windows」を参照

N

NLS_LANG 環境変数

- インストール後のグローバル化・サポート, 2-4

O

Oracle

- ユーザー・マニュアル、注文, ix

Oracle Database

- BI Beans 用の設定, 2-5
- OracleBI Tools でのインストール, 1-7
- OracleBI Tools のサポート対象バージョンおよびパッチ, 1-5

ORACLE_HOME ディレクトリ

- 「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照

OracleBI Beans

- 「BI Beans」を参照

OracleBI Discoverer Administrator

- 「Discoverer Administrator」を参照

OracleBI Discoverer Desktop

- 「Discoverer Desktop」を参照

OracleBI Spreadsheet Add-In

- 「Spreadsheet Add-In」を参照, 1-2

OracleBI Tools

OracleBI Tools およびコンポーネント, 1-2
「OracleBI Tools のコンポーネント」も参照
インストール後のスタート・ガイド, 2-10

OracleBI Tools のアンインストール, 3-2

OracleBI Tools のインストール

OracleBI Tools のアンインストール, 3-2
OracleBI Tools のインストール後のスタート・ガイド, 2-10
OracleBI Tools の再インストール, 3-3
Oracle ホーム・ディレクトリ、計画, 1-6
インストール後の作業, 2-4
インストールのトラブルシューティング, A-1
インストールの前に, 1-1
インストール要件, 1-1
概要, 1-3

OracleBI Tools のコンポーネント

アシスティブ・テクノロジー, 2-4
インストール後の作業, 2-5
開発者ロール, 1-3
各コンポーネント, 1-2
管理者ロール, 1-3
コンポーネント実行時の表示言語, 2-4
コンポーネントの起動, 2-9
パワー・ユーザー・ロール, 1-3
ビジネス・ユーザー・ロール, 1-3
必要なメモリー, 1-4
ユーザー・ロールごとに推奨される, 1-3

OracleBI Tools の再インストール, 3-3

OracleBI Warehouse Builder

概要, 1-3

OracleMetaLink, ix

Oracle Universal Installer (OUI)

「インストーラ」を参照

Oracle ホーム・ディレクトリ

BI_ORACLE_HOME の指定, 2-2
OracleBI Tools 用の指定, 2-2
OracleBI Tools 用の選択, 1-6
インストール要件, 1-6

S

Section 508 準拠, vi

Spreadsheet Add-In

インストール前の要件, 1-9
概要, 1-2
起動, 2-9
ソフトウェア要件、Microsoft Excel, 1-6

sqlnet.ora ファイル

更新, 2-4

T

TMP サイズ

インストール要件, 1-4

tnsnames.ora ファイル

更新, 2-4

U

unicode テキスト

このマニュアルで使用される表記規則, vii

W

Windows

Java Access Bridge、インストール, 1-8
OracleBI Tools のコンポーネントを実行するための
アシスティブ・テクノロジー, 2-4
インストーラを実行するためのアシスティブ・テクノロジー, 1-8
システム・ファイル, 1-10
ソフトウェア要件, 1-5

あ

アクセスビリティ

Oracle ユーザー・ドキュメント, vi
Windows での Java Access Bridge のインストール,
1-8

アシスティブ・テクノロジー

OracleBI Tools コンポーネントを実行, 2-4
Windows での Java Access Bridge のインストール,
1-8
インストーラを実行, 1-8

い

移行

Oracle9i JDeveloper の BI Beans プロジェクト, B-1
イタリック体

このマニュアルで使用される表記規則, vii

イタリック体の unicode テキスト

このマニュアルで使用される表記規則, vii

インストーラ

アシスティブ・テクノロジー, 1-8
ユーザー・ロールおよび製品コンポーネント, 1-3

インストール

Java Access Bridge (Windows のみ), 1-8
Windows システム・ファイル, 1-10
アシスティブ・テクノロジーの使用, 1-8

インストール後, 2-4

BI Beans の作業, 2-5
Discoverer Administrator の作業, 2-5

Discoverer Desktop の作業, 2-8

OracleBI Tools コンポーネントを実行するためのアシ
スティブ・テクノロジー, 2-4

OracleBI Tools のコンポーネントの作業, 2-5

OracleBI Tools のスタート・ガイド, 2-10

sqlnet.ora ファイル, 2-4

tnsnames.ora ファイル, 2-4

グローバルゼーション用の表示言語, 2-4

インストールの前に, 1-1

「インストール要件」を参照

インストール前

BI Beans の要件, 1-9

Spreadsheet Add-In の要件, 1-9

インストールの前に, 1-1

コンポーネント固有の作業, 1-9

インストール要件

BI Beans, 1-9

Oracle ホーム・ディレクトリ, 1-6

Spreadsheet Add-In, 1-9

コンポーネント固有, 1-9

ソフトウェア, 1-5

ハードウェア, 1-4

え

エラー

- BI Beans の接続の問題, A-3
- windows システム・ファイル, 1-10
- コピーまたはリンクのエラー、トラブルシューティング, A-2

お

オペレーティング・システム

- Windows システム・ファイル, 1-10
- Windows のソフトウェア要件, 1-5
- ソフトウェア要件, 1-5

オラクル社

- オラクル社への問合せ, ix
- オラクル社への問合せ, ix

か

ガイド

- Oracle BI Tools, viii
- アクセシビリティ, vi
- ユーザー・ドキュメントへのアクセス, 2-8

開発者ロール, 1-3

カッコ

- このマニュアルで使用される表記規則, vii

環境変数

- グローバリゼーション・サポート用の NLS_LANG, 2-4

管理者ロール, 1-3

関連ドキュメント, viii

き

起動

- BI Beans, 2-9
- Discoverer Administrator, 2-9
- Discoverer Desktop, 2-10
- OracleBI Tools のコンポーネント, 2-9
- Spreadsheet Add-In, 2-9

け

言語

- OracleBI Tools のコンポーネントの実行, 2-4
- 動作環境ロケールの設定, 1-8

こ

コピー・エラー

- トラブルシューティング, A-2

し

障害

- OracleBI Tools のコンポーネントを実行するためのアシスティブ・テクノロジー, 2-4
 - インストーラを実行するためのアシスティブ・テクノロジー, 1-8
 - ドキュメントのアクセシビリティ, vi
- ### 省略記号
- このマニュアルで使用される表記規則, vii

す

スワップ領域

- インストール要件, 1-4

そ

ソフトウェア要件

- BI Beans 用の JDeveloper, 1-5
- OracleBI Tools, 1-5
- OracleBI Tools 用の Oracle Database, 1-5
- Spreadsheet Add-In 用の Microsoft Excel, 1-6

て

ディスク容量

- インストール要件, 1-4

と

動作環境

- ロケールの設定, 1-8

ドキュメント

- Oracle BI Tools, viii
- アクセシビリティ, vi
- ユーザー・ドキュメントへのアクセス, 2-8

トラブルシューティング

- BI Beans の接続の問題, A-3
- OracleBI Tools のインストール, A-1
- コピーまたはリンクのエラー, A-2

は

ハードウェア要件

- OracleBI Tools, 1-4
- OracleBI Tools コンポーネント, 1-4
- パワー・ユーザー・ロール, 1-3

ひ

ビジネス・ユーザー・ロール, 1-3

ビデオ

- インストール要件, 1-4

表記規則

- このマニュアルで使用される, vii

ふ

ファイル

- sqlnet.ora ファイル, 2-4
- tnsnames.ora ファイル, 2-4

太字体

- このマニュアルで使用される表記規則, vii

へ

ページファイル・サイズ

- インストール要件, 1-4

ま

マニュアル

- Oracle BI Tools, viii
- Oracle のユーザー・マニュアルの注文, ix
- アクセシビリティ, vi
- ユーザー・ドキュメントへのアクセス, 2-8

め

メモリー

- Discoverer Desktop、必要な, 1-4
- OracleBI Tools のインストール要件, 1-4
- 各コンポーネントのインストール要件, 1-4

ゆ

ユーザー・ドキュメント

- Oracle BI Tools に関連する, viii
- Oracle BI Tools 用に提供される, viii
- アクセシビリティ、Oracle, vi
- アクセス, 2-8
- ユーザー・マニュアルの注文, ix

よ

用語

- このマニュアルで使用される表記規則, vii

り

リンク・エラー

- トラブルシューティング, A-2

ろ

ロール

- OracleBI Tools のインストール・プロファイル, 1-3
- 開発者ロール, 1-3
- 管理者ロール, 1-3
- パワー・ユーザー・ロール, 1-3
- ビジネス・ユーザー・ロール, 1-3

ロケール

- JVM ロケールの設定, 1-8